フランス語の衝撃編入動詞*

中　本　武　志

筆者は中本(1998)において、フランス語の名詞 'coup' 及び動詞 'frapper (hit)' を分析し、それぞれ次の構造を持つことを示した。

(1) coup : [*x* μ [GO [*(extended) body (part)* TO *z*]]]
(2) frapper : [*x* μ [GO [*coup* TO *z*]]]

上記の '*x*' は有生・無生、意志の有無を問わない行為者を、'*z*' は着点を表す。特に動詞 'frapper' は編入を仮定することによって、以下の三通りの構文をとり得ることが説明できる。

(3) frapper-coup-P-NP
　a. [*x* μ [GO [*coup* TO *z*]]]
　b. Il a frappé un petit coup à la vitre.
　　he hit a little knock to the glass
　　彼は窓ガラスを軽く叩いた。
　c. Vague frappant des coups furieux contre le navire (GR)[1]
　　wave hitting ART.INDEF. ～ furious against the ship
　　船を激しく打つ波
(4) frapper-P-NP
　a. [*x* μ [GO [*coup* TO *z*]]]
　b. A la nuit close, il frappe à sa propre porte, ...
　　at the night shut he hits at his own door
　　すっかり夜になって、彼は自分の家のドアを叩き
　　(TLF; FARRÈRE, *Homme qui assass.*, 1907, p.203)

c. Dactylo qui frappe sur les touches (LDF)
typist that hits on the keys
キーを叩くタイピスト

(5) frapper-NP

a. [*x* *μ* [GO [*coup* TO *z*]]]

b. Un homme, un furieux, canne haute, tombe sur les musiciens, et
a man a furious stick high falls on the musicians and
les frappe et les rosse.
them hits and them beats
男が怒り狂って杖を振り上げ、音楽家達に襲いかかり、したたかに殴り付ける。
(TLF; PESQUIDOUX, *Livre raison*, 1925, p.123)

c. Les vagues frappent la côte.
the waves hit the coast
波が岸辺に打ち寄せている。

上記の編入操作に関する理論的側面については、Hale and Keyser (1992, 1993, 1997) を参照されたい。とにかく、フランス語の打撃動詞について、彼らの主張が応用可能であることが明らかになったわけであるが、いかんせん、動詞一つでは説得力に欠ける。本稿では '*coup*' を組み込む動詞が他にも存在することを示したい。

1. BATTRE

1.1 打撃動詞としての用法

打撃動詞である 'battre (beat)' の分析からはじめよう。この語は 'frapper (hit)' の類義語であるが、'frapper' よりも構文と語義・選択制限の関係が緊密であるように思われる。すなわち、編入や項の移動に応じて、対応する語義が決まっているのである。また、打撃の回数を問わない 'frapper' とは異なり、必ず複数回でなければならない。これを編入される '*coup*' を複数形にして表すことにする。

(6)　[x μ [GO [*coups* TO z]]

可能性として、(3, 4, 5) に相当する編入構文があるはずであるが、まず(5)に対応する構文から、検討をはじめよう。

(7)　battre-NP

a.　[x μ [GO [*coups* TO z]]]

b.　Cet enfant est brutal, il bat ses camarades. (LDF)
this child is brute he beats his comrades
この子は乱暴で、友達を殴る。

c.　Tout à coup, ..., j'entends une femme qui bat du linge. (GR)
suddenly I-hear a woman who beats linen
突然、女がシーツを打つ音が聞こえる。
(GR; J. RENARD, Journal, 29 janv. 1898)

d.　La pluie bat les vitres. (LDF)
the rain beats the panes
雨が窓を打っている。

e.　Le vent lui bat le visage. (DNT)
the wind him/her $_{\text{DAT}}$ beats the face
風が彼（女）の顔を打っている。

構文上は 'frapper' と何ら変わるところがない。主語・目的語ともに有生・無生いずれも可能である。では次の構文はどうであろうか。

(8)　battre-P-NP

a.　[x μ [GO [*coups* TO z]]]

b.　La pluie bat contre la vitre. (LDF)
the rain beats against the pane
雨が窓を打っている。

c.　...les étriers battaient contre les flancs déchirés du coursier.
the stirrup was-beating against the flanks torn of-the war-horse

あぶみが軍馬の裂けた横腹を何度も打っていた。
(TLF; SANDEAU, *Mlle de la Seiglière*, 1848, p.329)

この場合、主語は無生でなければならない。'*coups*' のみの編入と意味選択が連動しているのである。最後の構文はどうであろうか。

(9) battre-coups-P-NP
a. [x μ [GO [*coups* TO z]]]
b. *Il a battu des coups rudes sur la table.
he beat ART.INDEF. *coups* hard on the table
彼はテーブルを乱暴にたたいた。
c. *Paul a battu des coups secs sur l'épaule de Jean.
Paul beat ART.INDEF. *coups* sharp on the-shoulder of Jean
ポールはジャンの肩をぴしゃりとたたいた。

'frapper' と異なり、この構文は許されない。これでは、打撃動詞は '*coups*' を編入しているとする根拠が一つ失われたことになる。しかし、編入の証拠は上の構文だけではない。意味と統辞の両面で、なお証明できる。もし以下の分析が正しいとするならば、(9)が容認されないのは、打撃動詞の場合に限り '*coups*' が義務的に編入されるという語彙的特異性によるものであるということになる。

まず '*coups*' が持つ意味の特徴であるが、中本 (1998) では「音の発生」と「身体（で扱える道具）による打撃[2]」の二点を挙げている。典型的な音源は太鼓であるが、それ以外の無生物が連続的な音を発することを表すことができる。この点については本稿で挙げる例文すべてに当てはまるが、下にいくつか例を挙げておこう。

(10) battre-NP 構文
a. battre le tambour/la caisse
beat the drum/the drum
太鼓を打ち鳴らす；鳴り物入りで宣伝する
b. Tout à coup, ..., j'entends une femme qui bat du linge.
suddenly I-hear a woman who beats linen

突然、女がシーツを打つ音が聞こえる。
(GR; J. RENARD, Journal, 29 janv. 1898)

(11) battre-P-NP 構文
— Mais, Lampito, quelqu'un frappe à la porte.
but Lampito someone hits at the door
— Non, maîtresse, c'est l'auvent qui bat contre le mur.
no Madame it is the porch roof that beats against the wall
「おや、ランピート、誰かがノックしていますよ」
「いいえ、奥様、あれはひさしが壁にぶつかっている音でございます」
(TLF; FLAUBERT, *La Tentation et st Antoine*, 1849, p.378)

さて、次の対応を見て頂きたい。

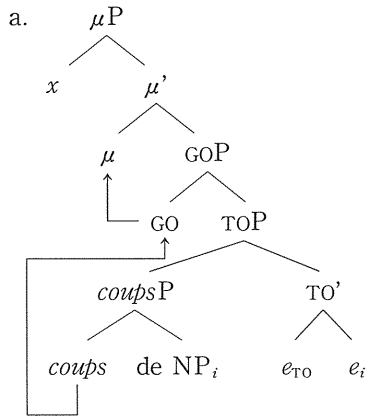
(12) a. battre le tambour (= (10a))
b. battre du tambour
beat of-the drum
c. Le tambour bat.
the drum beats

(12a, b) はほぼ同義で、「太鼓を鳴らす」ことを、(12c) は「太鼓が鳴る」ことを表している。このような完全な統語的な交替は打撃動詞としては上の例に限られるようであるが、それでも何らかの統語的な対応を説明しなければならない。

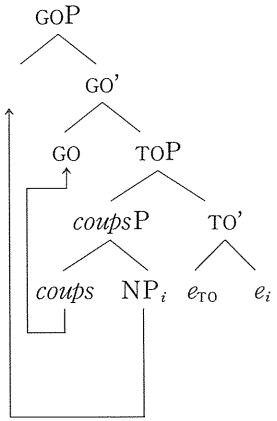
はじめに (12a) に関しては (7a) でよいであろう。次に (12b) であるが、前置詞 'de (of)' は着点を表さないから、(8a) の派生では問題がある。内容の希薄なこの前置詞は通常、名詞のデフォルトの格表示として用いられる。従って、動詞補部の de NP は実は '*coups*' の補部であるとすると、(13a) のように NP と同一指標を持つ着点項および 'TO' が空である構造が考えられる[3]。最後に (12c) であるが、動作主がなく、目的語が主語の位置に現れているかのように見える。(13a) と平行した派生を考えると (13b) のようになる。このとき主語 NP は名詞 '*coups*' からデフォルト格は表示されず、主格表示位置に移動する。本稿では詳しく触れる余裕はないが、これは可能な限り、構造格を付与せよという普遍的な有標性制約が存在しているからであろう。あるいは(14)のように単純に目的語

を主語位置に移動させる派生も考えられるが、'TO' の格素性が照合できなくなるので、ここでは採用しない[4]。

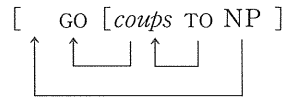
(13) a.



b.



(14) [　GO [*coups* TO NP]



1.2　移動の 'coups' 編入

中本（1998）では 'coup' の基本語義として、行為・移動・打撃の三つがあり、それぞれが緊密に関係していることを示した。'frapper' は打撃の '*coup*' を組み込むだけであったが、'battre' は移動の '*coups*' を編入して「何かを動かす」「動かして音を発生させる」という意味も表すことができる。その場合、基底構造は次のようになる。

(15) a. coup : [x μ [GO y]]
　　b. battre : [x_i μ [GO [coups$<x_i, y_j>$ y_j]] [5]

上の構造から次の構文が生じる。

(16) battre-de-NP
　　a. battre des mains (en signe d'approbation) (GR)
　　beat of-the hands (in sign of approval)

（賛成のしるしに）拍手をする

b. battre des cils/des paupières (GR)
beat of-the eyelashes/of-the eyelids
まばたきをする／まぶたをぴくぴくさせる

c. battre des ailes[6]
beat of-the wings
（飛ぼうとして）羽をばたつかせる

直接他動詞構文が存在しないが、これは格表示できる着点述語 'TO' がないことからの帰結である。さらに、行為者の現れない構文もある。

(17) NP-battre-coups

a. battre des coups réguliers (GR)
beat ART.INDEF. *coups* regular
（心臓や振り子が）規則的に打つ

b. Le cœur de Guillaume sautait en cadence, battait
the heart of Guillaume was-jumping rhythmically was-beating
des coups sourds de mineur (...)
ART.INDEF. *coups* dull of miner
ギヨームの心臓はリズミカルに飛び跳ね、坑夫の槌音のように鈍い音を立てていた。
(GR; COCTEAU, *Thomas l'imposteur*, p.173)

(18) NP-battre

a. Le cœur/le pouls bat. (TLF)
the heart/the pulse beats
心臓が脈を打つ。

b. Les artères/les tempes/les veines battent. (TLF)
the arteries/the temples/the veins beat
動脈／こめかみ／静脈が脈を打って（ぴくぴくして）いる。

c. Les cils/les paupières battent. (GR)
the eyelashes/the eyelids beat
まばたきをする／まぶたがぴくぴくする。

d. Un long moment où j'entends battre le sang dans mes poignets.

a long moment when I-hear beat the blood in my wrists
長い間、手首で脈を打っている音が聞こえる。
(TLF; GIONO, *Un de Baumugnes*, 1929, p.165)

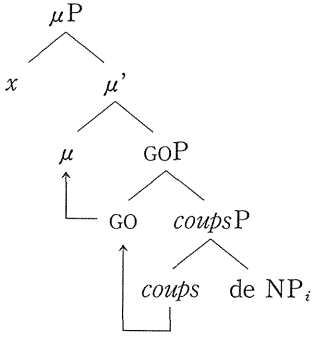
e. Un métronome qui bat régulièrement (LDF)
a metronome that beats regularly
規則正しく打っているメトロノーム

f. Si le vent fait battre le portail, je crois que tu reviens.
if the wind makes beat the gate I think that you come back
風が門をばたばたさせれば、君が帰って来るのだと思う。
(TLF; POURRAT, *Gaspard des Montagnes*, La Tour du Levant, 1931, p.166)

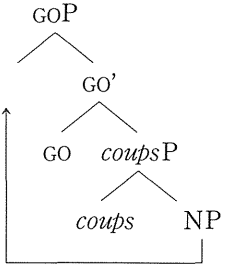
ここでも格表示子の 'TO' が存在しない[7]。従って、*y* 項は対格や斜格以外の格すなわち主格または '*coups*' からのデフォルト格を表示される必要がある。それでは上の三構文を順に検討していこう。

⑯では「動かされる対象」である *y* 項は '*de*' を伴っており、(12b/13a) によく似た構造であると思われる。さらに興味深いことに⑰では '*coups*' が生じており、編入が単なる stipulation ではないことが分かる。また打撃動詞においても '*coups*' が存在することの傍証になる。最後の⑱は (13b) と同様の派生が考えられよう。それぞれの派生構造は以下の通りである。

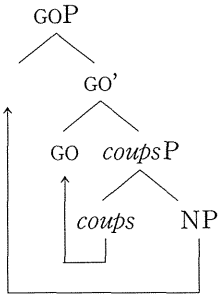
⑲ a.



b.



c.



ここで、(17/18)すなわち(19b, c)の表層主語が深層主語ではないことを示す統語上の根拠を挙げておこう。規則的・反復的動きをする主体が身体部位である場合、譲渡不可能所有（inalienable possession）の関係にある所有者が、与格代名詞として現れることがある。

(20) a. Le cœur me battait de joie. (GR)[8]
the heart me $_{DAT}$ was-beating of joy
私の胸は喜びに打ち震えていた。

b. ... le sang lui battait aux tempes et ses entrailles
the blood him $_{DAT}$ was-beating at-the temples and his entrails
se serraient.
REFL. was-tightening
血液が彼のこめかみで脈打ち、内臓が締め付けられていた。
(TLF; GREEN, *Moïra*, 1950, p.221)

譲渡不可能所有の所有者を表す与格は被所有物をc-統御しなくてはならないという条件があり、非対格動詞や受動態を除き、主語に定冠詞付き身体部位は現れないのである[9]。

(21) a. Le médecin leur a examiné la gorge.
the doctor them $_{DAT}$ has examined the throat
医者は彼らの喉を調べた。

b. *La tête lui a heurté le plafond du cockpit.

the head him $_{DAT}$ has bumped the ceiling of-the cockpit
彼の頭がコックピットの天井にぶつかった。

(22) a. La tête lui tourne.
the head him $_{DAT}$ turns
彼はめまいがする。

b. Les cheveux lui ont été lavés.
the hairs him $_{DAT}$ has been washed
彼は髪を洗われた。

これが必ずしも、派生(19)の決定的証拠とは言えないが、有力な根拠とはなり得よう。

このセクションの最後に、一見 '*coups*' 以外の要素が目的語になっているような文を見ることにしよう。

(23) a. Un balancier qui bat les secondes (GR)
a pendulum that beats the seconds
秒を刻む振り子

b. Les sabots des garçons de ferme battaient l'heure de dîner ...
the sabots of-the boys of farm were-beating the-hour of dinner
農場の若い者達がはいている木靴の音で、食事の時間であることが分かる。
(GR; J. VALLÈS, l'Enfant, p.168)

上の例で 'secondes' や 'l'heure' という単語自体にはない「音」の概念が存在している。これは '*coups*' の効果に他ならない[10]。従って、以下の編入操作による語形成の後で、'*coups*' の音形が削除されているのだと考えられる。さらに 'battre' ではこの編入形の '*coups*' が挿入されるのである。

(24) [coups secondes/heures]
↑└──────┘

(25) [GO [*coups* NP]

coups secondes/heures

1.3 打撃の結果を伴う用法

打撃の結果といっても、語用論的な可能性は無限にあるが、語彙化されたものは多くない。次の例では「*z* を打って、*w* を生じさせる」という意味であるが、'frapper' と全く同じであるので、本稿では詳細な議論は省略し、(27)のいずれかの構造が考えられるとだけ述べておくことにする。

(26) a. battre monnaie
beat money
貨幣を鋳造する

b. battre la mesure
beat the time
拍子をとる

(27) a. [*x* μ [COME-INTO-EXISTENCE [*w* BY [GO [*coups* TO *z*]]]]]

b. [*x* μ [GO [*coups* TO [*z* INTO COME-INTO-EXISTENCE *w*]]]]

さて最も重要なのは「勝つ；破る」を意味する場合である。目的語には敵を含意するもの、あるいは記録が選択される。派生構造は(27)に類似したものが考えられる。違いは、(27)では結果が目的語として実現するのに対し、(28)では結果状態が編入されてしまうため、含意にとどまるという点である。

(28) a. battre l'adversaire/l'ennemi
beat the-adversary/the-enemy
敵を破る

b. battre un record
beat a record
記録を破る

(29) a. [x μ [COME-INTO-EXISTENCE [*victory* BY [GO [*coups* TO z]]]]]

b. [x μ [GO [*coups* TO [z INTO COME-INTO-EXISTENCE *victory*]]]]

1.4 代名動詞

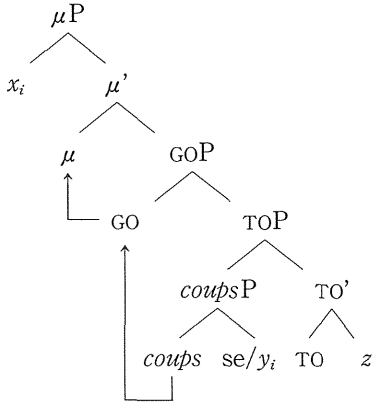
'battre' が照応形代名詞 'se' を伴う場合、「打つ」以外に「戦う」という意味が生じる。まず「打つ」方であるが、打撃の対象が身体部位に限られるという選択制限があり、'se' はその譲渡不可能所有の所有者を表すという場合と、互いに殴り合うという二つの意味があるが、基本的には 1.1 で述べた構造と同じであり、着点 'z' が身体部位または相互照応形の 'se' になるだけであるので、ここでは繰り返さない。一方、「戦う」という語義の方は、「自分自身を移動させて、相手に打撃を与える」と解釈できる。しかし 'battre' の語彙表示には移動の対象を投射する位置がないので、この項を取り得る '*coups*' の補部として出現することになる。すなわち、以下の構造である。

(30) coups : [x μ [GO [y TO z]]

(31) a. battre : [x_i μ [GO [*coups*P TO z]]]

coups y_i

b.

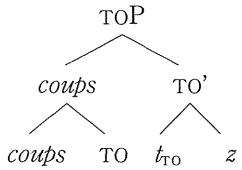


この場合、「勝利」という結果は存在しない。また‘TO’の編入は許されず、必ず前置詞として実現しなければならない。

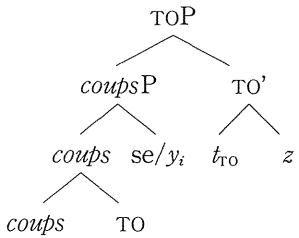
(32) a. se battre contre un ennemi/un adversaire (GR)
REFL. beat against an enemy/an adversary
敵と戦う
b. se battre avec qqn à coups de poing (GR)
REFL. beat with someone with blows of fist
～とこぶしで戦う
c. se battre contre les préjugés (LDF)
REFL. beat against the prejudices
偏見と戦う

‘TO’の編入ができないのは、構造上の問題があるからである。(33)は編入すなわち主要部移動後の構造であるが、‘*coups*’に補部が存在しない時には何ら問題がないのに対し、補部が投射されてしまうと、‘TO’の痕跡が先行詞にC-統御されず、適正に統率されない[11]。従って、ECPにより‘TO’の可視的編入は禁止されるのである[12]。

(33) a.



b.



1.5　まとめ

以上、特殊な専門用語や原義を離れた慣用句を除き、‘battre’の主な語義が次の単純な構造で表されることを見てきた。

(34)　[x μ [GO [*coups* (TO z)]]

(34)には結果の状態や'*coups*'の補部などの拡張が可能であるが、すべて最小限であり、かつ一般性の高い操作である。決してその場限りの記述的なものではない。

これまで中本（1998）にせよ、本稿にせよ、打撃動詞ばかりを扱ってきた。編入による語彙表示を'*coups*'を例にとって厳密かつ詳細に検討するのが目的であったからである。最後にやはり'*coups*'を編入する動詞で本来は打撃とは無関係の動詞を取り上げることにしよう。

2. TIRER

'tirer'は本来「引く（pull)、引き出す、引き伸ばす」など、ものの移動を表す動詞であるが、次のように「～に向けて銃などを撃つ」という意味にもなり得る[13]。

(35) tirer-coup (-P-NP)

a. tirer un coup de feu sur qqn (GR)
pull a shot of fire on someone
～に銃を一発撃つ

b. tirer un coup de canon/de pistolet (TLF)
pull a shot of cannon/of pistol
大砲／ピストルを一発撃つ

c. tirer des coups de feu/de revolver (TLF)
pull ART.INDEF. shots of fire/of revolver
銃／拳銃を数発撃つ

(36) tirer-P-NP

a. La police a tiré sur le fuyard. (LDF)
the police has shot on the fugitive
警察は逃げるものたちに向かって発砲した。

b. tirer dans toutes les directions (GR)
shoot in all the directions
あらゆる方向に向けて撃つ

c. tirer à la cible (GR)
shoot at the target

的を撃つ

(37) tirer-NP（狩猟用語）

a. tirer un oiseau/un lièvre/une perdrix (TLF)
shoot a bird/a hare/a partridge
鳥／ウサギ／ヤマウズラを撃つ

b. J'allai tirer les choucas qui nichaient dans les pierres du
I-went to-shoot the jackdaws that nested in the stones of-the
vieux château.
old castle
私は古い城の石に巣を作っている黒丸鳥を撃ちに行った。
(TLF; FRANCE, *Vie fleur*, 1922, p.408)

c. Guillaume Tell tira une pomme sur la tête de son fils. (GR)
William Tell shot an apple on the head of his son
ウィリアム・テルは息子の頭の上にあるりんごを射た。

上の構文は打撃動詞である 'frapper' や 'battre' と平行しており、ほぼ同じ派生で記述できる。なお、次の構文のように目的語が移動の対象であって、'*coup*' や着点ではないことがある。この時、移動の対象は(25)のように語形成の段階で '*coup*' に編入され、'*coup*' が音形を失っていると考えられる。この場合、単に '*coup*' の代わりに実現したといっても事実上は同じことである。

(38) a. tirer une flèche (GR)
shoot an arrow
矢を射る

b. tirer un feu d'artifice
shoot a fireworks
花火を打ち上げる

c. Il a tiré cinq balles de revolver sur elle. (LDF)
he has shot five bullets of revolver on her
彼は彼女に 5 発の弾丸を撃ち込んだ。

(39) [x μ [GO [*coup*P TO z]]]

coup y

3. まとめ

我々はこれまで、打撃を中心とした語彙の表示を見てきた。理論的には Hale and Keyser (1992, 1993, 1997) の派生表示が広い応用範囲を持っていることが分かった。記述的には、非常に限られた語彙でしかないが、詳細かつ厳密な分析ができた。今後は打撃以外の語彙で、同様の編入分析が可能であるかどうかの確認をすることが課題となる。

註

* 本稿は筑波大学「東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究」(特別プロジェクト長：原口庄輔) の補助を受けている。記して感謝する。

1 以下、例文を引用する辞書には以下の略号を用いる。
LDF : Dictionnaire de français, Larousse
GR : Le Grand Robert
TLF : Trésor de la langue française
DNT : Le dictionnaire de notre temps
ロワイヤル：ロワイヤル仏和中辞典

2 中本 (1998) で述べた通り、用語として不適切ではあるが、「身体」には無生物も含めるものとする。また、人間の身体部分というのは主として「手」であるが、詳しくは検討しない。

3 中本 (1998) では、名詞としての '*coup*' は項をとらず、行為の参加者は付加詞の 'de＋無冠詞名詞' として現れるとした。ここでは、'de NP' はイベント項を持つ複合述語の 'μ-GO-*coups*-TO' の項であるから、冠詞が必要となる。なお空の着点や TO については、pro などいくつかの可能性が考えられるが、現段階では検討課題とするほかない。また代名動詞のセクションで述べる通り、TO から *coups* への移動は可視編入ではなく、LF での移動となる。

4 格素性を照合するには、項が補部または指定部に現れるか、編入する必要がある。また(14)の派生構造が(i)であるから、NP と 'TO' が指定部-主要部関係になり、格照合が可能になるが、それでは NP が主格を付与されなくなってしまう。
(i) [NP GO-*coups*-TO [t_{coups} t_{TO} t_{NP}]

5 これは中本 (1998) で採用した簡略表記である。また *y* 項は正確には '(extended) body (part)' であるが、これも簡略化した。

6 名詞形では 'battre' の派生名詞以外に、'coups' を用いることができる。
(i) battement/coups d'ailes

7 (17)の '*coups*' は遅くとも LF で複合述語を形成する要素であり、格照合には関与しない。

8 インフォーマントによれば、この構文は現在形では用いられず、過去形ならば、凝った文体で可能である。現在時制では次のようにいうのが普通である。

(i) Mon cœur bat.
my heart beats

9 (21)は Vergnaud and Zubizarreta (1992)から、(22)は Guéron (1984)から借用した。フランス語の譲渡不可能所有については、この両論文を参照していただきたい。

10 次の表現も参照されたい。

(i) A ce moment le premier coup de deux heures résonna dans le silence.
at that moment the first stroke of two o'clock resounded in the silence
その時2時を知らせる最初の鐘が静寂の中を響き渡った。
(TLF; SOULIÉ, *Mém. diable*, t.1, 1837, p.12)

11 ここでは Chomsky (1986)における c-統御の定義を採用する。

(i) α を支配する最初の節点が β を「支配」し、かつ α が β を支配しない場合この場合に限り、α は β を c-統御する。

(ii) γ のすべての切片 (segment) が α を支配する時、γ は α を「支配」するという。

(33a)では '*coups*' には切片が二つあるが、'TO' を支配するのは一方だけであり、ゆえに '*coups*' は 'TO' を「支配」していない。'TO' を「支配」するのは TOP である。(33b)でも '*coups*' は 'TO' を「支配」していないが、*coups*P は 'TO' を「支配」している。しかし *coups*P は 'TO' の痕跡を支配しておらず、'TO' は自分の痕跡を c-統御できない。

12 複合述語 'μ-GO-*coups*-TO' を形成するため、'TO' の不可視移動が必要であるが、Chomsky (1995)の最小主義プログラムによれば、LF では範疇全体が移動することはないので、ECP は無関係である。

13 岡本 (他) (1998) で指摘されている通り、標的に当たったかどうかまでは含意されていない。その他の点についても同論文を参照されたい。

参考文献

Chomsky, Noam. (1986) *Barriers*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

———. (1995) *The minimalist program*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

Guéron, Jacqueline. (1984) "Inalienable possession, PRO-inclusion and lexical chains," in Jacqueline Guéron, Hans-Georg Obenauer and Jean-Yves Pollock (eds.) *Grammatical representation*, Dordrecht: Foris, 43-86.

Hale, Ken and Jay Keyser. (1992) "The syntactic character of thematic structure," in Iggy Roca (ed.) *Thematic structure: Its role in grammar*, New York: Foris Publications, 107-143.

———. (1993) "On argument structure and the lexical expression of syntactic relations," in Ken Hale and Jay Keyser (eds.) *A view from Building* 20, *A festschrift for Sylvain Bromberger*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 53-109.

———. (1997) "On the complex nature of simple predicates," in Alex Alsina, Joan Bresnan, and Peter Sells (eds.) *Complex predicates*, Stanford, California:

CSLI Publications, 29-65.
中本武志（1998）「フランス語の『打撃』を表す語彙の表示」筑波大学『東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究』平成9年度研究成果報告書、217-236.
岡本順治・佐々木勲人・中本武志・橋本修・鷲尾龍一（1987）「打撃・接触動詞の動能交替と結果の含意」筑波大学『東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究』平成9年度研究成果報告書、173-191.
Vergnaud, Jean-Roger and Maria Luisa Zubizarreta. (1992) "The definite determiner and the inalienable constructions in French and in English," *Linguistic Inquiry* 23(4), 595-652.

辞書コーパス

Dictionnaire de français, Larousse. 1987.
Le Grand Robert de la langue française, dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française, 2e édition, 9 vol., Le Robert. 1985.
Trésor de la langue française, tome 1-16, Centre national de la recherche scientifique. 1971-1994.
『ロワイヤル仏和中辞典』東京、旺文社. 1985.